

令和6年度 第1回農村RMO推進研究会（概要）

日 時：令和6年9月17日14時～17時

【ディスカッションの概要】

＜テーマ1＞ 農村RMOの伴走支援とは

質問1：地域の力に応じた支援（支援のバランス）について、どのように判断され、どのように地域に入り、その結果どのように変わったのか。また、それを受けてどうだったか教えていただきたい。

〔質問者：若菜アドバイザー〕

【まちの人事企画室】

- ・私たちは、与謝・宇川・伊根の3地区を支援しており、それぞれ組織構成や地域づくりの状況は異なるため、地域の状況に合わせて、何をどう動くのかは常に判断しながら動く必要があると感じている。
- ・与謝地区については、そこまでサポートしなくても、企画の発案や推進の部分は十分になされる体制が元々あったので、必要以上に支援をするのではなく、困っている時や相談を受けた時に支援を行っている。ただ、放置しているのではなく、定期的にしっかりコミュニケーションをとり、困っていることや事業停滞に繋がる種がないか確認しながら進めている。
- ・府との関係について、毎月1回定例会を開催し、現場で何が起きているのか、現場で感じた課題や今後の見通しなどフィードバックしており、双方から議論を持ちかけられる良い関係性の中でやらせてもらっていると感じている。

【京都府丹後広域振興局】

- ・タイミングが合えばまちの人事企画室と一緒に地域に入ることもあり、まちの人事企画室が行けない場合は、振興局の職員のみで入ることもある。
- ・地域の方は、年上の方であったり、営農経験が長い方であったり、私自身の経験が浅く話をうまく引き出せないことがある。そのような時に、営農やプログラミングなど経験豊富なまちの人事企画室と一緒に地域に入っていただけで感謝している。
- ・事業計画の通りに進めることは良いことであるが、必要に応じて臨機応変に計画の調整を行うことも大切。この事業が終わった後に、地域が本当に自分たちの活動を良かったと認めていただけることを一番に考えて、関係者が対応してくれるので感謝している。

【与謝地域山村活性化協議会】

- ・取り組みの企画等は協議会にて行っているが、まちの人事企画室はITに詳しいので、取り組みが本当に時代に合っているのか、どのシステムが良いかなど判断しづらいことなどを相談している。

質問2：支援を受けている割合について、「町」、「まちの人事企画室」、「府」それぞれどのくらいであるか教えていただきたい。

〔質問者：小田切座長〕

〔与謝地域山村活性化協議会〕

- ・地域住民としては、府の職員は少し遠い存在になるので、やはり町の支援は重要だと思う。
- ・大まかに町4割、まちの人事企画室3割、府3割という感じである。

質問3：危機感があっても何をどうしたら良いのか分からず、会議を開いても課題ばかり出てきて雰囲気が暗いまま終わることもある。モチベーションをあげる方法についてアドバイスをいただきたい。

〔質問者：榊田アドバイザー〕

〔与謝地域山村活性化協議会〕

- ・与謝地域では、以前から、京都府の地域づくりの事業を実施してきたので、勢いがあり、ベースも出来ているため質問のような状況には当てはまらないが、町全体で見たら、そのような地区も見られ、その差はすごくあると感じている。

〔まちの人事企画室〕

- ・会議でそのような状況になった場合は、地域の間人関係もありその場で発言できないこともあるので、一旦会議は終えて良いと思っている。その個別の課題に対して、どのようにアプローチをした方が良いのか、こういうことから始められるのではないかなど、噛み砕いた上で、個別で話をするようにしている。
- ・大きな課題は我々で分解して、まずはここからやってみませんかという話をその場ではなく、別日でしかるべきタイミングですることが一つのポイントだと思う。

〔京都府〕

- ・今まで取り組んできた過程をゼロベースで考えてしまうところが見受けられるので、少なくともこんなことはやってこれた、自分たちにはその力があるという事の振り返りが必要だと思う。
- ・地域からの相談に対してアドバイスをすることは良いが、行政からの過度なアドバイスはどこかで行政に「やらされた感」に切り替わってしまうので、そこが少し難しいところである。

質問4：農村RMOの取り組みは、関係者が多く、範囲が広域であるため、地域をまとめる際の苦勞を教えていただきたい。

また、女性の関わりについても教えていただきたい。

〔質問者：北沢アドバイザー〕

〔まちの人事企画室〕

- ・関係者が多いので、一堂に会して合意形成を図り進めることはすごく大変なことであり、そこまでは正直できていない。ただ、個別に分解していくと、この部署に対しては、具体的なメリットなど一緒に取り組む意義が見出せるので、そういうものが見出せたときに、関係者を巻き込んで徐々に増やしていく（合意形成）ことができるのではないかと感じている。

- ・女性の関わりについては、丹後地域では多くの女性が活躍されているという印象がある。例えば、地域資源活用の取り組みであれば、加工品の開発やお弁当づくりなど、普段から当たり前のようにならされている料理がとても美味しい。また、暗い雰囲気での会議でも、ビシッと云う女性がいると、男性の背筋が伸びるシーンもある。
- ・男女比がどうという話ではないが、色んな視点を持った人が、多く関わるのが大事だと感じている。

質問5：まちの人事企画室の皆さんは、町外から入られ、かつ、若い印象がある。実際に地域に入って支援する際に、支援者の年齢が高すぎても若すぎても難しいと思われるが、その辺は如何か。

〔質問者：濱田アドバイザー〕

〔まちの人事企画室〕

- ・年齢の壁を感じることはあるが、そこは属人的にやっているので、関係性は作れていると思う。
- ・私たちが若いので、最初のコミュニケーションで警戒されることはあるが、現場に出ていくことでそこは解消できていると思っている。
- ・私は以前、農業に従事していたので、農繁期に農作業を手伝ったり、力仕事も手伝えるので、実際に手を動かすことで信頼をいただいたと思う。
- ・女性からは、キャラクター的な部分でかわいがっていただけることもある。

<テーマ2> 伴走支援の「体制」、「人材育成」、「横展開」について

質問6：そもそも伴走型支援とは何か。そのポイントについて「1行」でお答えいただきたい。

〔質問者：小田切座長〕

〔京都府〕

- ・「お互いの顔の見える・わかる関係での主体性を意識した地域への寄り添い」と思っている。
- ・「少なくとも現場に職員が出向くことが最低条件」と考えている。

〔まちの人事企画室〕

- ・「地域に寄り添い、同じ視座で一緒に悩み考え抜く仲間」と思っている。
- ・あと、「地域の方々にかわいがられることも結構大事」ではないかと思う。

〔与謝地域山村活性化協議会〕

- ・「地域からしたら、空気みたいな感じ。柱みたいに寄り添うのではなく、つぶやける、心を整えるみたいな役割」が中間支援ではないかと思っている。

質問7：皆さんを見ていて、支援をする者が同じものを見ているからこそ支援ができると思った。県の方と話をしていると「市町村を支援することが自分たちの仕事」、「現場は振興局、本庁が現場に行ってしまうと云々…」などの話を聞くことがあり、みんなで同じものを見ることは意外と難しいと感じているが、京都府ではなぜそれが出来ているのか。

〔質問者：若菜アドバイザー〕

〔京都府〕

- ・かつては、京都府の「共に育む命の里事業」の終了や、コロナ渦により振興局若手職員も現場に行く機会が減り、現地に行っても何を喋って良いのか分からないという状況となった。
- ・去年から本庁の中に地域担当を設置し、本庁が地域に行くときは必ず振興局も一緒に行くようにしたことで、振興局の若手職員も地域に行くタイミングを理解して、毎回本庁が行かなくても振興局に地域の状況を確認したら分かるようになってきた。

質問8：京都府のように準備（体制）が整っていない、我々の地域にはまちの人事企画室のような中間支援組織はない。そんなときにどうしたら良いのか。そのヒントをいただきたい。

〔質問者：小田切座長〕

〔若菜アドバイザー〕

- ・支援の仕組みについて、本日の話を聞いて、県本庁だから、振興局だから、市町村だからと言いがちになってしまうが、どのような支援が必要なのか挙げて、それをやれる人がやるということだと思った。
- ・中間支援者を育てる研修を行うことがあるが、人材育成は難しい。一方、人材育成ではないが、支援できる人を、出来れば地域に根差したまちの人事企画のような方を、見つけて口説くという方法もあると思う。

〔榊田アドバイザー〕

- ・やれる人がやるというのはそのとおりであるが、やれる人がいない場合もある。京都府では、中間支援組織を作るときに、行政職員は異動があるので、地域おこし協力隊や集落支援員などの外部人材を活用されているが、そのような人たちが地域に受け入れられるようにする育て方、活用の仕方など、まちの人事企画室にお聞きたい。

〔まちの人事企画室〕

- ・人材を見つけて口説くというのは、きっかけになると思う。京都府では10年前くらいから移住政策に力を入れられており、他の地域に比べて下地があると思う。京丹後市の移住相談員や周りをサポートする人たちも移住者である。その下地をつくるには、10年くらいはかかると思う。
- ・Uターン者が一つの核になると思っており、そこに移住者がついて、少しずつ組織が出来上がっていくと思う。なお、まちの人事企画室の代表もUターン者で、我々も移住者である。
- ・1人で悩んでも続かない。2人でも3人でもいいので仲間と定期的に話し合いなど続けていくことで、少しずつ組織が育っていくと思う。その下地を作っているのは、Uターン者の熱量であったり、移住政策に力を入れ続けてきた結果ではないかと思う。
- ・農村RMOの伴走支援は3年目になるが、1年目、2年目はすごく大変で、どう入り込んだら良いの

か分からなかった。

【京都府】

- ・地域づくりに外部人材を投入するという話はよくされる場所。地域おこし協力隊は地域づくりとの親和性が高いと思うので、参画してもらえたら馬力は上がると思う。但し、市町村が課すミッションや自身のやりたいこともあるので、地域協議会と必ずマッチングする訳ではないため、安易に入れるべきではないとも考えている。
- ・一方で、このような方が地域に入った場合、「それは地域おこし協力隊でやってくれ」と全てをまかされることもあり、地域側にも受け皿としての心構えを一定程度は醸成しておくべきはないかと思う。
- ・移住者やエネルギーが豊富な方がいない地域に対しては、地域内外での仲間づくりの支援であったり、成功だけを求めない風土づくりなどは、我々行政でも出来るのではないかと考えている。

質問9：伴走支援には、地域外の人や地域で核になって一緒に動いてくれるUターン者も必要で、そのためには地域を好きになってもらう必要があると思う。まちの人事企画室の皆さんは移住者であるが、地域外から来て感じる地域への思いやモチベーションはどのようなものか。

〔質問者：濱田アドバイザー〕

【まちの人事企画室】

- ・地域を好きという気持ちは重要だと感じている。自分自身、この地域に住み続ける意味など日々考えており、その理由はある程度明確になってきたかと思う。本当に素晴らしい景色があって、自分自身も好きだし子供の代にもこの景色を残したいと思う。
- ・自分の生活の中に、地域が「好き」や「思い」みたいなものが自然と重なっている状況がある。農村RMOの伴走支援は大変なものではあるが、そこに自分なりの意義だったり目的をもって取り組まれているのが、一つのモチベーションになっているのかなと思う。
- ・Uターン者にとっても、「地域が好き」や「恩がある」というのは、一つのキーになっていると思う。

質問10：農村RMOのモデル事業が終了しても地域が取り残されないように、地域で核となって取り組みを引っ張っていく熱い思いを持った人が必要だと思う。

また、農村RMOの取り組みは、やらされてる感があるといけないし、楽しみがないと続けていくことは難しいと思うが、その点は如何か。

〔質問者：北沢アドバイザー〕

【まちの人事企画室】

- ・農村RMOのモデル事業では色々な活動を行っているので、事業終了後もそれをそのまま続けることは難しいと思うので、部分的に府や市町村などで予算化するのとは一つの方法だと思われる。
- ・まちの人事企画室としては、属人的なものになるが、大学生との連携であったり、特定地域づくり事業協同組合による労働力派遣、自社の事業ドメインの活用など、農村RMOの事業を通じて感じた課題をうまくポイントとして絞り出して、それを別事業で継続的に支援することは一つの手段と思っている。
- ・活動する中で疲弊していったら、熱量が覚めていくのを目にするので、楽しく、やらされ感が出ないよ

うに、気を付けて支援している。

【京都府】

- ・楽しみがないと続かないという御意見はその通りだと思う。
- ・農村RMOのモデル事業が終わった後について、そもそも自走の定義とは何なのか、行政側が定義すべきものかと思うところはあるが、「地域の中で話し合いが出来て、課題解決の糸口を見出すことができるようになる」までが、一旦のミッションになってくるのではないかと考えている。

質問 11：本年度、農村RMOモデル事業が最終年度を迎える与謝地域山村活性化協議会では、来年度以降、どのような展望をお持ちか教えていただきたい。

〔質問者：小田切座長〕

【与謝地域山村活性化協議会】

- ・今年度から、自主財源、今後の組織のあり方について議論しているところである。
- ・協議会は、中山間地域等直接支払制度の協議会が母体となっているので、その広域化に取り組むことが大きなポイントと考えている。
- ・自主財源の確保について、地域を応援するクレジットカードを発行しているのでそのファン層を広げること、また、本地域の急傾斜というメリットを活かして、小水力発電に取り組むことなどを考えている。

質問 12：京都府内で、中間支援組織がない地域の取り組み状況について教えていただきたい。

また、支援の横展開について、どのように支援を拡げていくのか思いを聞かせていただきたい。

〔質問者：小田切座長〕

【まちの人事企画室】

- ・定例会議とは別に、3年間の取り組みを振り返る会議を行っている。これまでの結果やノウハウを次に繋げていくために、マニュアルの作成や研修の実施など模索中である。
- ・伴走支援を行ったことのない団体は、何をどうスケジュールで動けば良いか分からないと思うので、その部分をマニュアルなどで可視化出来れば、中間支援組織をプロポーザル契約する際も、都会のコンサル企業に余計なお願いをしなくてもよくなる。
- ・伴走支援の中身がある程度わかった上で、実際に動ける事業者たちが集まりやすい状況を京都府内で作れたら良いと思っている。

【京都府】

- ・中間支援組織の伴走支援がないから、その地区が失敗しているということはない。但し、農村RMOのモデル事業の終了後も走り続けるには、中間支援組織や行政の一定の支援が必要と思うので、事業終了後に中間支援組織の有無が響いてくるかもしれない。
- ・今後は、上向きの支援だけでなく、取り組みの収束のさせ方として、無理のない方向に持っていく支援もあるのではないかと考えている。
- ・府内で中間支援組織の無い地域にも、地域が新たに走り出したときに、行政と中間支援組織と関係者

が伴走支援出来る体制を作っておく必要があると思っている。

<関係府省からの感想・助言等>

〔内閣府〕

- ・与謝地域山村活性化協議会では、農村RMOのモデル事業終了後の展開として、自主財源による運営を考えられているので、今後、法人形態について考える機会も出てくるのではないかと思う。
- ・法人形態として「株式会社」を検討される場合は、内閣府の制度で「小さな拠点税制」というものがある。これは、小さな拠点形成事業を実施する株式会社に対して、個人の方が出資する場合、出資額に応じて所得税が減額される制度になっているので、是非、ご検討いただければと思う。

〔総務省〕

- ・総務省では、RMOの形成支援や運営支援等を行っており、まちの人事企画室さんのような「中間支援を行うことができる方々」をどうやって増やしていくか、また、京都府のような「伴走支援・中間支援ができる意欲的な都道府県の体制」をどうやって構築していくか、我々としても課題意識を持っている。本日のご意見等を参考にしながら考えていきたいと思う。
- ・農村RMOのモデル事業が終了した後の自走について、大変皆さん課題意識を持たれていると思う。我々としても、地方財政措置等でRMOの支援等を行っているが、本日のご意見等も踏まえ、どういった支援が出来るのか改めて考えていきたいと思う。

〔文部科学省〕

- ・まちの人事企画室の皆さんが、地域外から来られて、地域の中でどのように動かれ、その地域をどのように好きになって、今の活動にどのような意義を感じられているのか、非常に印象に残った。
- ・地域外から来られた方が、風を吹かせて、色々な活動を変えていくことは十分あり得ると思うが、元々地域におられる方々に活動をどう定着していくかは、意識の共有や同じ体験をして意味をしっかりと実体験していただく必要があり、「この活動が大事だからやるんだよ」と他から教えられてしまうと、「やらされている」に繋がってしまう。
- ・まさに社会教育という手法を本当にうまく使われており、地域の人に理解してもらいながら、自分たちがやるのではなく、自発的にやってもらう仕掛けをされているところ、我々としても参考にしたいと思った。
- ・公民館などの地元のリソースをうまく活用されていると伺ったが、視聴いただいている皆さんも、農業や農地の話なので教育は関係ないではなく、地元の公民館や教育委員会等をうまく活用・連携していただけると、活動の幅が広がるのではないかと感じた。

〔厚生労働省〕

- ・本日、会場に来ている関係府省は全て同じ方向性を向いているが、やはり、行政の縦割りでうまくいかないところがあること、改めて感じた次第で「もったいない」と感じた。

- ・厚生労働省としては、「地域共生社会」という単語で喋っているが、実はこの目指している世界観は、農村RMOがやっていうような、まずは地域を元気にしながら、人も元気にしていこうというものであり全く一緒である。それが実際自治体でやっていく時には、縦割りになってしまうことは、私達の伝え方にも課題があるのかと思った。
- ・「重層」という話が出てきたが、厚生労働省では「重層的支援体制整備事業」という、まさしく重層的な体制を組んで取り組んでいきましょう。それは福祉だけではなく、色々な府省や地域の機能があるので、それをもう一度見渡ししながら、うまく重ね合わせたり、広げるという事業を展開している。
- ・私たちも自治体支援ということで伝えていきたいので、「重層的支援体制整備事業」についてよく聞いてみたい方などおられましたら、厚生労働省にお問い合わせいただけましたら、私達説明に向くので、是非、一緒にやっていきたいと思う。

【国土交通省】

- ・国土交通省では、人口減少や高齢化等に伴い、これまで通りの土地の管理が困難とされるなか、「国土の管理構想」という取組を実施しており、その中で、地域の方々が集まって、土地の管理のあり方について議論頂いているところ。
- ・若菜先生のご発言にもありました「(立場や役割が異なる中で)皆で同じものを見ることは難しい」という話があったが、まさにその通りだと感じた。そのような中でも、(本日事例発表のあった)京都府さんをはじめ皆様におかれては各自工夫されて取り組まれているところがすごく印象に残った。

【農林水産省】

- ・本日の議論で望ましい伴走支援の体制や人材の確保・育成、効果的な支援方法などいくつかヒントを導き出していただいた。本日の成果については、改めて整理して情報発信していきたいと考えている。
- ・本日は京都府の皆さま方に事例紹介をいただいたが、地域の状況などによって支援の方法は多岐にわたると考えている。今後全国の取り組み状況についても情報発信していく予定としているので、是非、ご参考にしていただければ幸いである。
- ・農村RMOの形成推進については、引き続き関係府省の皆様と連携のもと進めていきたいので、皆さまのご協力を重ねてお願いしたい。

<講評>

【若菜アドバイザー】

- ・1点目として、伴走支援と中間支援は少し違うものと理解した。
- ・伴走支援組織とか中間支援組織など「組織」ではなく、担える方が担うべきだと思う。
- ・伴走支援とは、同じものを、同じ地域を、同じ人を見るということでないかと、そうでなければ、地域を混乱させてしまう。

- ・ 2点目は、まちの人事企画室が何度も言われた「属人的」であること。地域づくりも地域づくりの支援も「人」であり、「属人的に動く部分を支える仕組み」という視点を忘れてはいけないと感じた。
- ・ 「属人的に動く部分を支える仕組み」については、京都府が言われた、本庁が行くときは振興局も必ず一緒に行ってもらうなどの「経験の共有」と「話し合いの場づくり」が重要である。話し合いの場づくり仕掛け方、仕組み方はコツが必要であり、ノウハウのある行政に「場」をつくってもらう方が良い場合もある。
- ・ 3点目は、今困っている地域の方、自分の愛着のある地域を何とかしたいと切実に思っている方、どこかに繋がるまであきらめないで欲しいということ。
- ・ 行政の方をお願いしたいのは、それは前任者が行ったから分からないなど言われることがあるが、前任者でも誰かに繋いでくれれば、どこかで支援に繋がる。
- ・ 声を掛けられたら、断らずに、誰かに繋いで欲しい。誰かに繋がれば、どこかで支援に繋がる。それが伴走支援だと思った。

【小田切座長】

- ・ 1点目は、伴走支援とは「重層型伴走支援」であることが良く分かった。
- ・ 京都府の場合は、府とその出先機関、市町村、中間支援組織の全てのプレーヤーが揃っていて、お互いにリスペクトしながら好循環を作り出している。これが「重層」の意味だと分かった。
- ・ そういう意味では、伴走支援とは、何かしらの形で、関係者同士のリスペクトが伴った重層型であると総括できるのではないかと思う。
- ・ 2点目は、伴走支援は「プロセス」が重要であること。
- ・ 支援を受ける側にも、支援を受ける力「受援力」が必要であり、それを常に養っておく必要があるという、このプロセスがあることが良く分かった。
- ・ まちの人事企画室では、「直接」、「間接」、「中間」支援とまとめていただいたが、伴走支援には、そのプロセスがあることを意識することが重要だと思った。
- ・ 3点目は、伴走支援には、中間支援機能がマストであることが分かった。「中間支援機能」としたのは、必ずしも組織が必要ではなくそれを担う者、機能があれば良いということだと思う。
- ・ 行政には人事異動があるので、まちの人事企画室による恒常的な支援、「地域に錨をおろす」と表現するが、錨をおろすことによって定着する、それが中間支援機能であろう。
- ・ 中間支援機能とは、ある種のハブ機能を持った、つまり全部わからなくても良い、分かる人に繋がれば良い、そのことによって全体像が見えてくると総括できると思う。
- ・ 伴走支援には、中間支援機能が必要で、その機能は出来ることからやっていく。今日お聞きの皆さまは、京都府のように条件が揃っていない、うちの自治体では無理だという議論もあるかもしれないが、そうではなく出来ることからやっていく、その機能を「受援力」を使って呼び込む、そういった発想が必要ではないか、そのように理解させていただいた。